本号の内容／本号の表紙について――アムステルダムの Gerdersekade――、（『倫理学論究』、vol. 5, no. 1 (2018), pp. 1-2）

『倫理学論究』、vol. 5, no. 1 の内容

2017 年 7 月 8 日、第 23 回関西大学倫理学研究会を開催し、お二方にご発表していただいた。

まず、「トランスジェンダーが直面する『問題』とは何か」と題して、宮田りりぃ氏（当時、関西大学大学院文学研究科博士後期課程）が発表された。トランスジェンダーはかつて医療モデルで考えられていたが、社会モデルで考えられるようになった。その転換にともなって、トランスジェンダーをみる視点が（精神）病理化から、近年に台頭してきた脱（精神）病理化へと移行してきた。宮田氏は、（精神）病理化の時点から脱（精神）病理化運動の台頭に至るまでの系譜を整理した上で、当該集団が直面する「問題」がどう捉えられてきたを批判的に考察した。

つぎに、「ドラァグ・クイーン再説――映画『パリは燃えているか』をめぐって」と題して、魚住洋一氏（京都市立芸術大学名誉教授）が発表された。この問題については、魚住氏は論稿「パリは燃えているか？――ドラァグ・クイーンたちへのレクイエム」（『龍谷大学論集』第 489 号、2017 年 3 月、http://w3.kcua.ac.jp/~uozumi/paris.pdf）のなかで論じておられるが、そのなかでは十分に論じることができなかった問題について、映画『パリは燃えている』をとりあげて再考された。映画に映し出されたドラァグ・ボール(drag ball)をめぐる時代状況や日本へのドラァグ・パフォーマンスの始まりの経緯などにも言及するとともに、魚住氏がとりわけ問題としてとりあげたのは、ジュディス・バトラーが主張したドラァグ・パフォーマンスによる政治的な「攪乱」の挫折、および、ドラァグ・クイーンたちがパフォーマンスを競い合うなかで作り上げた疑似家族「ハウス」についてであって、とくに後者の疑似家族「ハウス」について「生き残り」の戦略としてあらためて考察された。

当日は、フェミニズムに関心をもつ関西大学の研究者や性同一性障害を主題に卒業論文を書こうとしている学生のほか、学外からも看護学の研究者、アメリカ文学の研究者の方など多彩な顔ぶれの方々が参加され、充実した質疑応答がくりひろげられた。

本号は、その日のご発表をもとにして、魚住氏、宮田氏にあらためて稿を練られた論考をご投稿いただいた。魚住氏にはすでに昨年末に原稿をいただき、宮田氏にも三月に学位論文を提出されてからしばらくして原稿をいただいていたのだが、品川の学内の職務（現在、地

域連携センター長と高大連携センター長とを務めている）の多忙さから、編集作業が遅れに遅れてようやくこの九月に本号を発刊できたことは、魚住氏、宮田氏にまことに申し訳ないことだった。この場を借りておわびするとともに、しかし、おふたりのすぐれた論考が多くのひとの目にふれるようにできたことに喜んでいる。

本号の表紙について
――アムステルダムの Gerdersekade――

電子ジャーナルの表紙に工夫しても、読者は関心のある論稿だけを読んで、表紙をわざわざクリックすることはないだろうから、あまり意味がない。しかし、一応、毎号あれこれ考えては表紙をつけている。

今回はアムステルダムの運河の通りの写真にしてみた。アムステルダムの歴史博物館を訪問したおり、同性婚をいちはやく認めたこの国の経緯についての説明を読み、結婚を認められたカップルの写真をみた。そのあとで博物館のトイレをみて納得した。雑誌の冒頭でトイレの話を書くのも変だが、ヨーロッパのトイレはたいてい、男女に分かれていて、入ったところに手洗い場が、さらにその奥にドアがあって、男性の場合には一方に小便器が並んでいて、他方に個室が並んでいる。ところが、アムステルダム博物館のトイレは男女に分かれておらず、廊下にいくつもの個室のドアが並んでいる。この設計は、男女のいずれかに分けられることを苦痛に感じるひとへの配慮である。近年、日本でも、男性用と女性用の部屋とは別に、どちらでも使える個室を用意している建築物も生まれているが、たいていは車椅子の方やオストメイトの方が使える個室のニーズを満たすものであって、ただしそれ以外のひとの利用にも開いているというようである。それはそれで悪くないのだけれども、トイレというきわめて日常的な、かつまた必須の施設にあって、「男か女か」という二分法がつきつけられていて、しかし私たちのほとんどがそのことに気がつかず、当然のこととうけととめている点に、アムステルダムの博物館で気づかされた。とはいえ、廊下にならぶ個室のドアの写真ではなにがなんだかわからないだろう。そこで、同性婚をいちはやく認めた国への連想をさそうために、アムステルダムの Gerdersekade の通り（アムステルダム中央駅のすぐ東で、涙の塔を行き過ぎたあたり）の運河と街路の写真を掲載した。